



千葉県

久保田健治さん・美智子さん(樋渡)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：9月21日

浪江町での暮らしを楽しみにしています

久保田さん夫婦は、健治さんの会社の関係で、千葉県館山市に避難し暮らしていましたが、樋渡の自宅をリフォームし、今年10月中旬に戻ることにしました。健治さんは、何度か浪江町の自宅に行き来し、家の前の畑を耕すなど、準備を進めてきました。

浪江町での暮らしへの期待と不安をお聞きました。

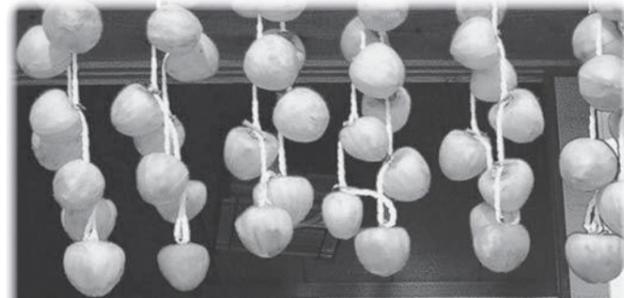


▲館山の借上げ住宅にて

美智子さん 震災の後、私は、主人と一緒に津島の実家に避難しました。実家には姉家族や叔父家族、全部で10人が避難していましたが、2日後の第一原発の水素爆発と避難指示を受け、どうしたものかと思っていたところ、郡山に住む弟が心配して迎えに来てくれました。みんな車で分乗し、弟のマンションに向かいました。弟のマンションで約2週間、多い時には16人が一緒に暮らしました。今考えると、横になって寝るスペースも十分に取れないのに、誰も文句を言わずよく一緒に過ごせたなと思います。先が見えない中、とにかく食べてニユースな

どで状況を見ることしかできなかったもので、不満を感じる余裕もなかったんだと思います。
健治さん 郡山に避難し2週間ほどたった頃、会社から連絡があり、宮城と館山の営業所のどちらでの勤務を希望するかと聞かれました。館山の営業所以前働いていたこともあり、館山への転勤を希望しました。今、住んでいるのは社宅で、会社が借上げ措置をしてくれました。歩いて行ける距離にスーパーやレストランがあり暮らしには便利です。近くにある「里見の湯」が震災後しばらくの間、避難者向けに無料券を配布してくれました。慣れない場所での暮らしで疲れていたものでありがたかったですね。私は、会社を定年退職した後、痛めていた膝の手術で入院、退院した後はリハビリも兼ねてジムに通いました。じっとしているのが嫌いなので、浪江に帰ったら、散歩をしたり、畑を耕したりして過ごしたいですね。
美智子さん 館山に移って、しばらくの間は話す相手もいなかったもので、家事を済ませたら寝て過ごすということもありました。そのうち近所の人たちとは、挨拶を交わしたり、雨が降ったら「洗濯物がぬれるよ」と教えてもらえるような関係になりましたが、浪江にいた時の

ように、お茶を飲んだり、おしゃべりしたりといったことがないので寂しかったですね。ここで暮らして7年、今では野菜をもらったり、おかずのやり取りをする友達もできました。ただ、親しくなった相手から、「賠償金もらって、お金あるでしょ、いいね」と言われた時には、口惜しくて、悲しくて、たまりませんでした。
浪江に帰ったら、郡山で弟と暮らす母の世話にも行きやすくなります。帰った人同士のお付き合いを楽しみたいですね。買物のことも考えて、スクーターか自転車を買おうかなとも思っています。
健治さん 私は7人兄弟の次男で、小高にある実家も更地になっていますが、先祖の墓があります。親戚も浪江町近隣に住んでいます。兄弟で墓を守っていきたいと思いますし、やっぱり、庭があつて土いじりができる家に住みたいと思います。浪江に帰って、不便なことも多いと思うけれど生まれ育った土地で妻と2人で暮らし、落ち着いたら仕事もできたらと思っています。
館山でお世話になった皆さんに感謝しています。そして、これからの浪江での暮らしを楽しみにしています。浪江の皆さん、よろしくお願ひします。



浪江のこころ通信

・第90号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

- ※1 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話した「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ったまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。
- ※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第90号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0240(34)4593





高木 七美さん(幾世橋)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 谷津
取材日：10月22日

被災したからこそその経験を生かして、人の役に立てるようになりたい



▲「人前で話すのは平気だけど写真は苦手」と照れる高木さん



▲復興大使の活動では何度も新聞で紹介されました

小さい頃から積極的な性格で、面白そうなことを見つけると何でも参加するという中学3年生の高木さん。避難先でもたくさんのことを吸収し、力強く成長しています。

大好きな音楽やアートで人の役に立ちたいと、将来に向けて頑張っています。

◆**避難生活での出会い**
被災した時は小学1年生でした。避難所や親戚宅に滞在した後、二本松市の岳温泉にあった祖父の知人の別荘に母と住むことになり、3年間暮らしました。父が仕事の関係でいわき市にいたので、5年生の時にいわき市に引っ越してからは3人で暮らしています。

◆**「ふくしま復興大使」を経験**
中学2年生の時、福島民報社で募集している「ふくしま復興大使」に応募し、昨年8月から1年間務めました。愛媛県松山市に派遣され、全国の高校生が俳句の腕前を競う「俳句甲子園」の取組を学びました。地域全体で参加できるとも大きなイベントで、福島でも何かこういふイベントができたらと思いましたが、今年6月に大玉村で開催された「全国植樹祭」のイベントでは、ふくしま復興大使の代表として活動内容の発表をしました。大舞台とても緊張しましたが、いい経験になりました。

◆**アートや音楽で地域を元気にしたい**
小さい頃から絵を描くのが好きで、中学では美術部に所属しています。ルノワールやモネのような古典も好きだし、現代美術も好きで、県内外の美術館によく連れて行ってもらいます。音楽やダンスも好きで、小さい頃に企業のキャンペーンにダンス動画を投稿したり、3日間のレッスンで英語のショーに参加する「ヤングアメリカンズ」に参加したりした経験もあります。今は、ペンタブレットを使って自分でデザインや作曲もしています。将来は芸術系の大学に進み、音楽やアートで地域を元気にする活動ができればと思っています。そのために、まずは高校受験を頑張ります。

被災したことで、浪江町、岳温泉、いわき市の三つの故郷ができました。浪江町も早く復興してほしいです。人が戻ってくれば、また前のようになんかになると思うので、そうなることを願っています。



木村 知宙さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：10月17日

将来、高校と連携して復興の仕事ができれば最高！



▲優しい笑顔が印象的な木村さん

震災時は小学5年生だった木村さん。その後、二本松市東和中学校、ふたば未来学園高等学校を卒業し、今年4月からは東京電力ホールディングスに入社。現在は福島第二原子力発電所に配属になり研修を受ける日々です。

仕事での目標と、プライベートでの目標の二つを大事にして暮らしています。

◆**復興に関わりたい**
私は将来、廃炉や復興の仕事を通じて、毎日ぎっしり詰まった研修内容で、風邪で1日休むと遅れが出てしまい自分が困るので、体調管理には気を付けていて、自炊では野菜を多く食べるように意識しています。

◆**1年後の成人式が気になる**
私に貴重な体験の場をくれたふたば未来学園の後輩のみんなと連携して、仕事や事業が実施できれば最高だなと思っています。震災が無ければ行くことになかった高校ですが、学校生活は楽しかった思い出がいっぱいです。社会人になった今、高校の同級生と会うと「高校生に戻りたいね」という話で盛り上がりたります。

◆**1年後の成人式が気になる**
私に貴重な体験の場をくれたふたば未来学園の後輩のみんなと連携して、仕事や事業が実施できれば最高だなと思っています。震災が無ければ行くことになかった高校ですが、学校生活は楽しかった思い出がいっぱいです。社会人になった今、高校の同級生と会うと「高校生に戻りたいね」という話で盛り上がりたります。